

---

# コンフリクト chapter15.5 -依子の頭はパイナップル-

松嶋ネコヂロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンフリクト chapter 15 - 依子の頭はバイナップル -

### 【ZPDF】

N1633Q

### 【作者名】

松嶋ネコロウ

### 【あらすじ】

連載小説「コンフリクト」の番外編。内容はchapter 15とチャプター chapter 16の間のお話です。本編をご覧いただかなくても理解できるように配慮したつもりですが、初見の方には分かり辛い点もあるかもしれません。

土曜日の朝のこと。

時刻は七時ほどで、布団の中、半分眠っている脳みそで俺は考えた。

俺のいとこの平野依子から、昨日送られてきたメールの件である。『お見舞いに来てほしいと、パパがいっていた。あしたあたしのいえにしゅつぶ』

依子の父、つまり俺の叔父にあたるわけだけど、その叔父さんが俺にお見舞いに来いと、そういう要求らしい。

何時に来いという指定はなかった。出来れば昼頃まで惰眠を貪つていたい。ていうか、わざわざ一度依子の家へ行く必要はあるのだろうか。そのまま病院で落ち合えばよくな? お前の家なら一人でござる。

いや、そもそも何故依子は俺ばかりを自分の家に誘つて、あいつからは俺の家に来ないのか。

あ、弟がいるからか。あいつ馬鹿だしうせえし、依子が来るとアホみたいにはしゃぐし。俺も依子もつるさこのは嫌いなので、お互いのためになるだろ? 空気を読める歳になるまでの辛抱だ、弟。

蝉がうるさくなる時分だったが、中途半端に暑いし、扇風機の風が超気持ちいい。ちょっと一度寝する。ぐつ。

ちよっぴり寝た。

携帯がピーピーと雄叫びをあげるので、起きの気だるくなつた筋肉を無理に動かせて携帯を取り、いらっしゃながらも通話ボタンを押した。

「納豆風呂で溺れる」

開口一番、俺はそんなことを言つていて、はて、一体何の夢を見ていたんだろうと自分の発言に首を傾げた。

「死んじゃえ」

やたらと辛辣な台詞が携帯の受話器から飛び出し、はからずとも口喧嘩風のスタートを切る。ブチ切れ状態の依子だった。声の調子はいつもローテンションなんだけど。

俺は部屋の壁掛け時計を確認した。

暁の、ほぼ十一時。一度寝開始から五時間。

「どうしてもつと早く起こしてくれなかつた」

「死んじゃえ」

相当怒っていた。でもお前、何時に来いとかメールに書いてなかつたぞ、とは言わなかつた。死んじゃえ、から、殺してやる、になりそうだつた。

「純が遅いから、今そつちに向かつてる」

「まじか、すぐに支度する」

依子が電話を切つた。

俺はあくびをして、半身を起こしつつ煙草に火をつけた。十一時間ぶりの煙草の味は極上で、俺の脳内にアルプス山脈でも出現したのではないかと錯覚してしまっぽどの爽快感だつた。ゆっくり吸つて息を吐き、窓から差し込む昼間の優しい陽光を全身に浴びて、それからゆっくりと伸びをしていると、唐突に部屋の扉が叩き開けられた。

なんだろうと振り返ると、扉の方では弟が憤怒の表情で立ち尽くし、右手には何故か仮面ライダーのプラスチックソードが握られていた。危険を察知してとっさに煙草を灰皿に押しつけて火を消す。案の定弟が駆け寄ってきて、死んじゃえ、と叫びつつプラスチックソードを俺の頭に叩き落とした。意味が分からぬ。鬼畜ヒーローとはまさにこのことである。

俺は涙目になりつつ頭をさする。弟が、うおー、と勝ちどきをあげた。

「すぐに支度しないじゃん」

顔を上げると、扉の方には依子が立っていた。怒つてゐるくせにいつも通りのポーカーフェイス。白のチュニックにレギンス姿で、暑いからかなのか、髪は頭頂でハーフアップに留められていた。似合つてゐるのか似合つてないのか知らないけど、それがまたパインアップルみたいで笑えた。

「いや、お前が来るの早すぎんだよ。メリーサンかよ」俺は思わず半笑いで答える。

「ばかにしてる。雄、やつて」

依子が悪の女帝の「」とく弟に命令を下す。俺は頭を守るようにしたが、それでも弟のプラスチックソードは襲いかかってきた。弟がソード片手に糀がる姿は、なんというか正義のヒーローというより、無闇やたらに棍棒を振り回すゴブリン兵士のようであった。ほどなくして俺はそのゴブリン兵士を叩きのめした。

弟はべそをかきつつ俺の布団をかぶつたが、依子は弟を用済みと判断してさつさと部屋を出ていき、俺も当然無視した。

居間には親父と母ちゃんがいて、親父は畳の上で大の字になつていびきをかいていたが、母ちゃんの方はやたらきらきらした目で依子を見つめた。

「純をお借りします」

依子がそう言つと、母ちゃんは首がもげんばかりに頷いた。二人で玄関へ歩いていくと、居間の方から、かつこいい、と母ちゃんの声が聞こえた。多分俺のことではないと思つ。

玄関を出て自分の身なりを確認したら、俺はユニークロの黒スウェットのままだつた。やべえ、寝間着のまま出てきちまつた。次に頭に手をやる。両側の側頭部の髪が盛大にはねていて、猫の耳みたいになつっていた。

「ちょっとここで待つてて、すぐに着替えてくる」

俺はたしかに依子へ向けてそう言つたはずなのに、依子は普通に自転車に乗つて普通にこぎ出した。

俺は家の玄関と、自転車で走り出す依子とを見比べて、かなり迷つたのだが、ともかく自分の自転車を引っ張り出して依子を追いかけた。住宅街で道が狭かつたから、少し恐い思いをする。

依子の自転車をこぐスピードに容赦はなかつたが、なんとか依子の隣に着いて彼女の横顔を見た。いつもの無表情だった。

「なあ依子。変じゃないかなあ、俺の格好。ねえ！」

無視された。むしろ自転車のスピードを早められた。変なことは百も承知で問い合わせた上シカトされたのだから、俺はものすゞく傷ついた。というかむかついた。

「おい、いくら俺が寝坊したからって知らんぷりはねえだろ」

依子は答えない。狭い道での併走は危険だつた。俺そつくりな頭をした猫にぶつかりそうになる。

「おいつ、無視すんななら帰るぞ。いいのかよ、帰宅するぞっ」

ふいに、依子が急ブレーキで自転車を止めた。突然の彼女の行動に動搖しながらも、俺も慌ててブレーキを引く。依子の五メートルほど先で、ようやく俺の自転車は止まつた。俺の前方すぐに電柱があつて、顔面からしこたま冷や汗が出てきた。

「なんなんだよ、もづ」

「帰るの」

振り返ると、依子はかすかに眉根を寄せて俺を睨みつけていた。依子なりの最大限の表情表現で、結構真面目に怒つてゐるようだつた。

「純は、パパのことなんかどうでもいいの」

そう責めたてられて、俺はやつと依子が怒つてゐる理由を知つた。俺が寝坊したからとか、依子の髪型を笑つたからとか、依子の手下を叩きのめしたからとか、俺の格好がださいからとか、そんな下らないことじやなかつた。

女つてめんどくせえ、そう思つ反面、俺はものすゞく反省してい

た。

「悪かった。どうでもいいなんて思つてない。俺だって」  
俺だって叔父さんをすごく心配してゐる、言いかけて、俺は口をつぐんだ。今の俺に、そんなことを言つ資格はない。俺は自転車を降り、丁重に頭を下げた。

「とにかく、ごめん。今すぐ帰つてすぐに着替えてくるから、悪いけどちよつとだけ

「はやくしろ」

今日の依子は恐かつた。

俺は何も言えず、速攻で家に帰り、迅速に着替えて、ぞんざいに寝癖をなおし、電光石火のごとくむきつきの場所に戻つた。そこに依子は居なかつた。

そこから少し進むと、一連の自動販売機があつて、そのそばの縁石に依子が腰をおろしていた。依子は爽健美茶を飲んでいて、縁石の上にはもう一本、ジョージアのコーヒーが乗つかっていた。

気づけば、俺は汗だくだつた。

俺が近寄ると、依子は縁石上の缶コーヒーを手にとり俺に差し出していく。

「仲なおり」

サバサバした性格なのが依子の数少ない長所の一つだと思つ。仲直り超楽だし。

本当のことを言つと、炎天下の中で自転車ごぎまくつて喉が渴いてたから、俺も爽健美茶を飲みたかった。でも多分、俺が喫煙者だから「コーヒー」が好きなんだろうと、依子なりに配慮してくれたんだと思う。ギャップ効果といふやつで、その上相手があの無神経依子だからか、俺は感激して涙がもうちよつとで出そうになつた。  
だから俺は、ありがと、とだけ言つてそれを受け取つた。  
なんでこいつ、こういうときだけ気が利くんだろ。

## 駅近くの総合病院。

受付を済ませ、依子と二人で待合室の長椅子に座り、案内を待つ  
ているときのことだつた。

「純の家にいく前に、神社にいつてきましたよ」

「聞いてもいのに依子がそんなこと言つてきた。依子が話題提  
供をすることがまず驚きだし、しかも何が言いたいのか分からぬ」

「へ、へえ」

しかし、せつかく依子が出してくれた話題なので俺も気の利いた  
ことを言いたいのだけど、やつぱりどう返せばいいか分からなくて、  
しばらく待つてみても依子から何の説明もないし、なので俺は眼光  
を強めて依子を見るのだが、依子は依子で、せつかく話題振ったの  
になんか言えよ、みたいな顔で見つめ返してくるしで、だんだん頭  
に来た俺は若干キレ気味で口を開いた。

「だからなに」

「願掛けしてきた」

それを早く言えよ。

やり切れない苛立ちを自分の膝を叩くことで解消する。どうして、  
いとこを相手にここまで気まずい雰囲気を作らなきゃいけないんだ。

「また、絵を描かせてほしいと言われた」

「絵？」

神社、願掛け、絵、と聞いて、俺は梅雨時期に祖母ちゃんの田舎  
に行つたときのことを思い出した。

たしかあの日も、俺や依子は叔父さんのお見舞いに行つた。この  
病院へ行く途中、偶然原村と会つて、彼は一晩中神社の絵を描い  
ていた。そのときだ。たしか原村は、数時間前まで平野が神社に  
いたよ、と言つた。そして、絵のモデルになつてほしいと頼んで、  
断られたと。

なるほど、だんだん読めてきた。

「つまり、叔父さんの病気回復を願つて、依子は毎回お見舞いの前  
に神社へ願掛けに行く。たまに原村がそこで神社の絵を描いている

から、原村から絵のモデルになつてほしいと頼まれてしまつ。あたしは嫌だと言つてゐるのに。さあ困つた。どうしよう、つてことか

「うん」

しゃあつ、と俺はガツツポーズをした。受付のおばさん看護師から変な目で見られた。

つづづく思つけど、依子との会話は頭の体操になるから非常に健康的だ。さつき、女ってめんどくせえ、なんてすじく失礼なこと考えたけど、女というより依子が面倒くさい。

「いいじゃん、描いてもらえば。モデル代金もらえるかもしんねー

だろ」

「やだ」

「なんで?」

「一度、いいよ、つて言つたんだけど、じゃあ笑つてみて、つて言われた」

「それでも描かせてくれつて言われたのか」

「うん」

依子は視線を落とした。自然に笑えないこと、自分なりに気にしているようだつた。

さすがにこれは原村が『テリカシー』を欠いている、依子が可哀想なので今度注意してやる、そう思つたが、俺も依子に似たようなことを言つた記憶がある。いつかの学校の図書室受付のときのことだ、たしか俺も依子に、笑つてみて、と言つた。

そのときのことを思い返すと、俺も原村の気持ちが分かつた気がした。

「原村もさ、依子に笑つてほしいって思つてんだよ。だから絵のためだなんて言い訳して依子に笑顔を作らせようとしたんだ。あいつ、ほんとやり方が回りくどいよな」

「意味が分からぬ。どうしてみんな、あたしに笑つてほしいと思うの」

俺は腕を組み、斜め上を見上げて考えた。

たしかに俺も、どうして依子に笑ってほしいのが、実はよく分かっていないのかもしない。図書室のときは『女友達を作らせるため』なんて銘打っていたけれど、俺自身がどうして依子の笑顔を見たいのか。

考えていると、依子がまた続けてくる。

「愛想笑いつてあるでしょ。あれは、結局笑つてないと一緒にやないの」

この話題、やけに依子の方から食いついてくる。それだけ依子にとつて大きな悩みなのだろうか。依子から相談を受けるなんてことが滅多にないから、俺は結構たじろいでいたし、割と真剣に答えてあげた。

「愛想笑いはさ、その人と仲良くなりたいからするんじゃねえか。依子が笑わなくたって、相手から笑顔で話しかけてくることもあるだろ」

すこく当たり前なことを言つてゐる気がする。これくらいなら依子だつて分かつていそうなはずだけど。

「あれは、愛想笑いだつたの」

ちょっと感心してゐる感じの依子。なんだ、この幼児を相手にしてる感覺。毎日のように本読んでるくせに、これくらいの理解力持つてろよ。

小学校のときは愛想笑いなんかなくても素の笑いでいたから、だから依子にも友達が居ただけど、じゃあ中学のときはどういう友達付き合いしてたんだ。親戚なのに、考えれば考えるほど依子が分からなくなる。

「俺も依子と話すとき、面白くもねえのに笑うだろ。ていうか依子と話すのくそつまんねえし。あれも愛想笑い」

「じゃあ純も、あたしと仲良くなりたいの」

「あー、うん」

すごく答えに困る質問だった。訊かれる方が恥ずかしい。つーか、依子と俺で仲良くなるもくそもないと思うんだけど。

依子がじつと俺の目を見据えてくる。俺はちょっと引いた。これもいつも思うんだけど、依子って、完全に目を逸らすか、マジでこっちの目を見つめてくるかしかない。ぶっちゃけビビるんだけど。仕方なく俺は、依子の頭のパイナップルを眺めた。

「みんなが笑わなくなると、どうなると思ひ？」

答えに窮するとはこのことなのか。中々難しい質問をしてきやがるなこいつ。十五歳にして真面目な顔してこうこうことを聞いてくるのははどうなんだろ。

海は何故青いのかだと、鶏とひよこはどうちが先なのかだと、どうして飛行機は空を飛ぶのかだと、「」飯食べて大きくなるなら自分は「」飯でできるのだから自分のことも食えるんじゃねえか、とか。

みんなが笑わなくなると、どうなると思ひ？

子供がしてくるような、大人ならもう氣にもとめないような疑問だ。それをまさか同じ年の、しかも血の繋がりも近いやつに聞かれたのだから、俺は相当地に追い詰められていた。それはもう、精神的に。

知るかこの馬鹿、といつもなら答えているところだけど、なにせ今の俺は真剣モードだった。ふと、ある言葉が頭をついて、どうしても離れなかつたから、俺はついそれを口に出してしまった。

「不安になる

「不安？」

興味津々に聞き返してくる依子だが、「めん、今俺適当に言つてるから。

「うん、不安」

「不安？」

「うん、すっげえ不安……」

だんだん、依子の将来の方が不安になつてきた。俺は下を向き、病院の真つ白な床をただじつと見つめて押し黙つた。

「平野依子さん」

受付のおばちゃん看護師が依子の名前を呼ぶ。はあ、よひりかへ依子との一人きりの時間が終わる。

「ねえ、どうしてあたしの頭ばかり見るの」

ふと、長椅子を立ち上がりかける俺に、依子が少し不満そうな顔で訊いてくる。俺は浮かしかけたお尻を戻して、今一度依子のパイナップルを見つめて、さてどう返そうと悩んだが、いい加減、俺も依子に気を使うのが馬鹿らしくなってきた。

「お前、なんか今日パイナップルみたいだよなと思つて」

「トイレについてくる」

依子が有無を言わぬでわざわざと行つてしまつたので、仕方なく俺が代理で受付へ向かつ。

三分ほどしてトイレから帰つてきた依子の髪は、やっぱりという

かなんといふか、いつものストレートロングに戻つていた。

「写メ撮つときやよかつた。せつかく面白かったのに」

「やっぱり、純は死んじゃえ」

依子は俺の顔を見ようとせず、廊下をずかずか歩いていった。

## (後書き)

本来、本編のchapter16として投稿するつもりでしたが、あまりに本編に絡めなさそうなネタ回だったために番外編としました。

イラスト・ふじみわん

> 1 6 7 3 8 — 8 8 4 <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1633q/>

コンフリクト chapter15.5 -依子の頭はパイナップル-

2011年7月26日03時37分発行